■ ミニレクチャー

援助するということ

竹　内　敏　晴（南山短期大学教授）

「対人関係における自己成長」という科目は、「援助法」という範囲に入っている。前には「カウンセリング」という科目だったと聞いて、私は考えこんでしまった。

他人を「援助する」「方法」。私にはそんな講義乃至実習をする智識も技術もない。いやそれよりなにより、私に人様を「援助する」という気持ちがあるだろうか。私はあわてて自分の心の奥底を覗き込んでみた。私は耳が不自由だったこともあって、人様から助けられ支えられていたことが、どれだけあったかわからない、と今さらのように思いあたる。が、私自身には……どうも私にはそういう心はまるでないとしか思えない。

私は、他人のからだに出あった時、一身動きが楽にできない人、声がうまくでてない人などなど……見ていられなくて、思わず知らず手が出てしまう、ということは経験する。それがも少し発展すると「人の身になる」ということであろう。それは文字通り、「身になる」のであって、相手のからだの内なる動きがこちらに移ってきて、胸が詰まってきたり、全身がよじれて来たりすることで、その人の気持ちを推しはかったり同情したりすることではない。だから、その瞬間にこちらのからだは動いており、手が出ており、身を支えたり、ことばをかけたりしている。

だが持続する意志を以て「援助する」という行為を私はできるだろうか？ イエスが「良きサマリア人」他の十人の癩病人に手を差しのべたのは、思わず知らず動いたからだなのか、意志による意識的行為なのか？

私は林竹二先生と御一緒に神戸の湊川高校に授業に入り、以来十年以上にわたって、若い仲間と自前で芝居を持って行った。外から見るとそれは部落解放あるいは解放教育運動の手助けをしているように見えもしたらしいのだが、私はただ私自身がそれまで思ってもみなかった魂の深さ真摯さに出会ったことに

驚き、それに交わりたいがために行ったのである。佛教で言えば、私は利己の小乗の徒に過ぎない。ただみずからの学びのために自分自身のために努めただけのことであって、他者を助け他者を救う菩薩行、即ち大乗の行為ではない。発菩堤心なることを私は未だ知らぬのである。

だが、アメリカから紹介されてくるカウンセリングやグループセラピーなどの技法において、他人を援助する気持ちがあるかないか、をことさら取り上げて吟味する、といった過程はどうも聞いたことがない。「援助する気持」はだれでも持っているはずのこととして、無条件に前提されている様子なのである。

考えてみれば、キリスト教倫理の根本は「汝自身の如く汝の隣人を愛せ」というイエスのことばなのであろう。とすれば他人を大切にし、その手助けをするということは、私などから見れば意志された行為であるけれども、キリスト教文化の伝統の中で自己を形成してきた人々にとっては、当然のことであり、生まれ育った土壌において養われた感受性に従っての「自然な」行為なのだろう、ちょうど母国語の感じ取り方と同じように。

だが、私たち日本人にとっては事態はまるで異なるだろう。勿論苦しむ人々のためにボランティアを志す人も多いし、親身になって他人の世話をする親切な人も沢山いる。だが、それはその人その人のその時の気持によることであって、「援助する」ことが倫理として要請されているわけではない。いわば気分まかせに過ぎない。

芭蕉が富士川のほとりを行くと、河原の葭の間であろうか赤子の泣き声がする。捨子であった。芭蕉は泣き声を聞き捨てて去る。父を恨むな母を恨むな、これ天にして汝が性のつたなきを泣け、と言い残して。野ざらし紀行の冒頭である。農村では貧しさの故に生まれてきた子を、それが特に女であったら、その場で息を塞いで殺しそのまま埋めてしまう、いわゆる「間引き」が日常のこととして扱われていた時代である。芭蕉にはもしその子が生きのびたにせよ、行末の酷さがまざまざと見えていたであろう。かれはここで「助けない」という決断をしたのであり、かれにとってもそれは心に重いことであった故にこそ、わざわざ紀行に書き残したのであろう。おのが身の拙なさ、とは芭蕉自身がおのれに投げた嘆息と断念のうめきでもあったのかも知れない。ともあれ、ここには、「助ける」ことを倫理とする精神はない、と言ってよい。

だがこれは、あるいは社会一般の通念としてその精神があったとしても、それを断ち切っておのれを漂泊の身と定める激しい決意をそこに読むべきなのかも知れない。森有正はアフリカの黒人部落に医師として身を投じて一生を終えたシュバイツアーについて、かれは２０世紀最大のオルガニストになったはずの人なのに、と嘆き、その芸術的達成を捨てて黒人のために働いたことを、むしろ非難めいた口ぶりで書いている。これは私にとってはかなり意外な感じであって、いまだに森氏全体の像とうまく適合しないのだが、これもあるいは芭蕉の決意と一脈通じる森氏自身の選択であるのかも知れぬ。だがシュバイツ

アーにとって、あるいはその行動を培い支えたキリスト教文化にとっては、神の命ぜられた「援助する」道の新しい展開であったのだろう。

ある主婦は、仲の良い友だちが病気になった時、まっ先にかけつけて入院の世話をし、毎日病院へ通って看護を手伝うばかりでなく、友だちの残された家族のために食事の仕度をし子供たちを学校に通わせ、実に心のこもった「援助」をした。その同じ人が住居の近くに脳性麻痺児を主とする養護施設ができると聞くと、町内の雰囲気が悪くなるし、土地やマンションの値が下がる、といって反対運動を始めたという。身内や親しい人のためになら骨身を惜しまずつくすという態度は、古い時代に於いては、親兄弟の暮らしを助けるために身を売った娘や、義理ある主君のためにわが子を身代りに殺す親といった、歌舞伎の悲劇にも数多く見られる日本人の伝統的な態度だが、さて、一旦、その関係の外のものが相手となると、見捨てる、というより、関わりのないものとして意識から排除してしまう、というのも、私たちの社会に伝統的に見る態度である。この、好きな人なら助けるけれども、イヤな人はイヤというのは、ホンネによって動くという意味では、倫理といういわばタテマエによってたとえいやいやながらでも動くという態度に比べれば、より正直であり人間的だとも言えるだろう。だが、自分にとって大切なものを助けたり救ったりするのは、自分の感情を満足させる行為、つまりは自分をかわいがる行為に過ぎまい。

とすると、「援助する」ということの本来の意味は、たとえキライでも見知らぬものであっても、人であれば、いや、生きもの（仏教で言えば衆生）であれば、手をさしのべるということにあるのではあるまいか。問題は私と他人、＜ひと＞と＜ひと＞との関係とはなにかということに移行する。

森有正は、日本人の人間関係は「二項関係」だと言う。たとえば、息子と話す父は自分のことを「おとうさんは」と名乗る。つまり「あなたの父」であって、一箇の独立不変の人格としての「私」ではない、ということである。また、日本語では「これは私の本」と客観的に言い切ることはない。「……です」とか「……だよ」とか必ず相手に話しかけ説明する態度の現れとして言葉は成立する。だから日本人は、常に二人一組の親密さの間柄に閉じこもっており、孤独な主体と主体とが関わりあい契約しつつ作りなしてゆく真の社会関係を結ぶことが難しい、と彼は論じている。彼によれば、本居宣長は、聖人や仏のようなエライ人をお手本とする儒教や仏教のような外来思想は自分たちの平凡人には用はない、として、日本人古来の生きざま心ばえを甦らせようとした。かれはその意味で見事な人であるけれども、かれが言う「よきひと」は他人の心の動きを繊細に感じとる、というより浸透する、「もののあわれ」を知る人であって、倫理的に優れた人ということではない。つまりこれは社会的価値と無縁の考え方なのであって、宣長は実際生活において、極めて少数の心を許した知りあいとのみ交際していたという。

私は近頃改めて「人格」ということばについて考えている。私は演劇の分野

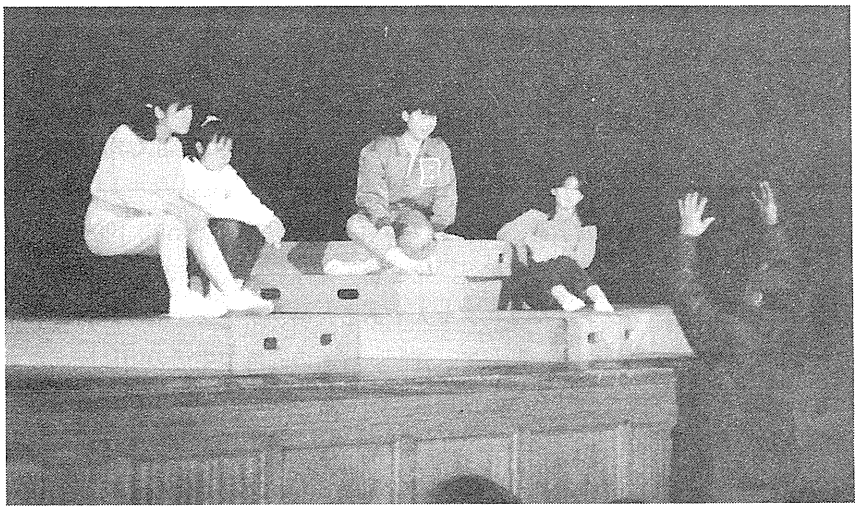
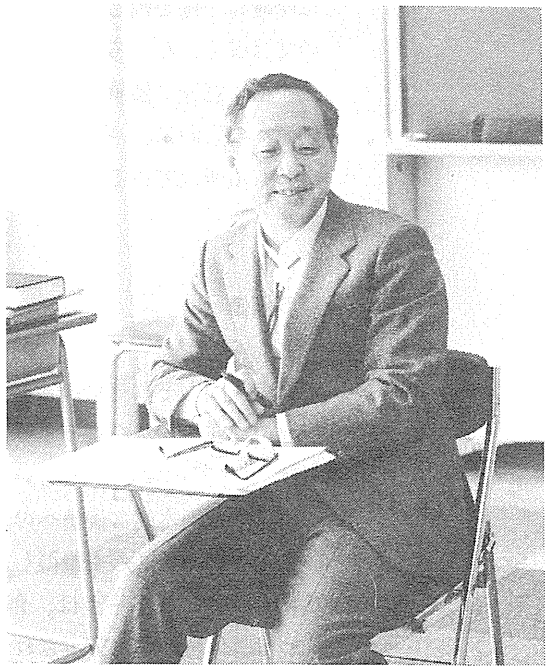
で四十年近く仕事してきた。二十世紀における演劇が前世紀と際立って異なる特色の一つは、人格の分解あるいは崩壊という主題である。十八〜九世紀における近代市民ドラマの主人公たち、たとえばイプセンやトルストイの登場人物たちは、いずれも確固とした輪郭を持つ性格を持っていた。だれの前に出、どんな場でもノラはノラであり、変わることがない。それが人間であり人格と呼ばれるものだと無前提に考えられてきた。

だがほんとにそんな不変の人格なんてあるんだろうか? という問いから二十世紀のドラマは始まっている。妻に対するおのれ、子に対するおのれ、上司に、友人に、飲み屋において、会議場において、孤独において、そこに現れるおのれは、全く別々ではないか。人はそれぞれの場においてそれぞれの役割を演じており、さまざまのペルソナを持つ。どこに統一ある不変の人格などがあるのか。かくて新しいドラマの主人公たちは名を失い、分裂し、AとかBとか、あるいはAでありA'でありA"であるものとして登場する。そのような思考と表現の世界に身を置いて来た私にとって改めて「人格」と重大めいて言われると、どこか、苦笑いしたくなるようなものものしさがあった。しかし、ヨーロッパ人たちにとって「人格の分解」として自覚される事柄も、私たち日本人にとってはそう名づけを聞いて安堵した途端に、人間としての意味が手の中からすりぬけて落ちていってしまうような事柄なのではないだろうか。沢山の場面で、それぞれにおける役割を演じて、いわばそれぞれにおける二項関係に埋没して疑うことがなかったのが一般の日本人だとしたら、そもそも分解したり崩壊したりすべき「人格」など、はじめからなかったわけだから。

ただひとり大地に立つということ、

神の前にただひとりであること、

それが人間として存在するという自覚であるとしたら、私は、どのような人の面前に立ち、どのような場におかれても、すべて見透かしの、どんな仮面も用をなさぬ、一箇のものであるより仕方がないであろう。裏も表も、逃げかくれする蔭も、全くない。二項関係のあたたかさ、ほの暗さに逃げ込むことのできない、ひとり立つもの。「人格」という概念はそこにおいて成り立った、孤独の別名なのではあるまいか、と私は考えるようになった。(ならば「神は死んだ」と宣言される時、人格は分解するのは必然だったわけである——ヨーロッパにおいては。)

私を神が見給うことは、他の人の上にも神がい給うことである。そのかれへ向って手をさしのべる時、あるいはかれは私を傷つけ殺すかも知れぬ。にもかかわらず手を触れてゆくこと、そこに初めて人間と人間との関わりが起こりうる、ということであろう。私は授業の中で学生たちに尋ねてみたことがある。「コミュニケーションときくとき、あなた方が思い浮かべるイメージは基本的に以下に言うどちらだろうか。1)相手と距離を保って、言語その他で少しずつ理解を深めてゆくこと。2)相手とジカに触れ合いあるいは融けあうこと」。

答は１０人中、１）が８人、２）が２人、１）の中で２）を併せてイメージするものが２人であった。この１）の態度はM. ブーバーがハイデガーを批判したことばをかりれば、「顧慮的援助」に止まること、ということに近いだろうか。真に他者との共同の生へ踏み出すことは自己を突破されることだとブーバーは主張する。「援助する」とは、恐らく相手によって、私の「仮面」がはぎとられてゆくことであり、私の「人格」が分解するか、あるいは甦って成長するか、の賭となってゆく行為であり、その選択は即ち「愛」と呼ばれる行為として自覚されねばならぬのであろう。私は「愛」に耐え得るであろうか?